

マタイの福音書 第6章 28節

「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどのようにして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。」

乾いた天気がしばらく続き、今日は久しぶりに雨音を聞いている。それほど激しくなく、秋雨、秋時雨の響きである。それに気温も急降下というわけではなく、穏やかに下降している。濁った空気の下で、紅、黄色、褐色と華やかさを競っていた木立の葉がしっとりとしている。来る寒風に少しずつ備える季節である。

乾いたとき、雨に打たれるとき、寒風に吹きさらされるとき、どのときも木立は木立、葉は葉、枝は枝のままである。周りの変化にありのままの姿をさらす。それだから、時折おりのいのちの輝きがある。季節とともに時を進んで来たものの輝きがある。時を造り進めてくださったお方がいる証を、木立も枝も葉もそのままの形です。謀が何も無い澄んだ証である。

秋と木立を見たが、イエスは野原に咲く花に目を向けさせる。高くそびえるものだけに注ぐ視線を足元に向けさせる。小さな小さいいのちに目を向けさせる。そこにもドラマが起こっている。小ささ、大きさではなく、目を向けるいのちがドラマを起こす。そのいのちの源であるお方が見る者のいのちの道筋を導く。

2021年11月21日